

こぶとりじいさん

(大分県)

むかし、あるところに、ほったにこぶのあるおじいさんがいました。

ある日のこと、おじいさんは、おばあさんににぎり飯をこしらえてもらって、畑に出かけていきました。

お昼になって、おじいさんはにぎり飯を食べようとしたが、うっかり下に落としてしまいました。にぎり飯は、ころころ転がっていきました。おじいさんは、

「にぎり飯やあ、待て、待て」といって、おいかけていきました。すると、にぎり飯は、地面のあなの中に転がりこんでしまいました。

おじいさんは、にぎり飯を追いかけてあなの中に入っていきました。すると、^{*}てんぐさまがいて、みんなで、

「てんぐ、てんぐ、三てんぐ」と歌いながらおどっていました。

てんぐさまたちは、おじいさんを見ると、

「あれえ、あそこに、おかしなじいさんが来とるぞ。あいつをひきさいて食おうじやないか」といいました。おじいさんは、

(食われちゃたまらん)と思って、

「おれを^{*かあ}加てて四てんぐ」と歌いながら、おどりました。てんぐさまたちは、

「あれえ、おもしろいじいさんだ。こっち来ておどれ」といいました。そして、てんぐさまたちが、

「てんぐ、てんぐ、三てんぐ」というと、おじいさんが、

「おれを加てて四てんぐ」といって、いっしょにおどりました。

しばらくおどっているうちに、つかれてしまったので、おじいさんが、

「わたしはもう帰りましょう」というと、てんぐさまたちは、

「そんなら、じいさん、あしたもきつと来い」といいました。

「はい、まいりましょう」

「そんなら、約束のしるしに、おまえのこぶを取つとくぞ。あした来たら、返してやる」
てんぐさまたちは、そういつて、おじいさんのほったのこぶを取ってしまいました。

おじいさんは、うちに帰ると、となりのおじいさんに、てんぐの話をしました。となりのおじいさんも、ほったにこぶがありました。この話を聞いて、

「そいつはいい。おれもこぶを取ってもらおう」と思いました。

つぎの日、となりのおじいさんは、おばあさんににぎり飯をこしらえてもらって、畑に行きました。ところが、にぎり飯は、いっこうに落っこちません。おじいさんは、わざとにぎり飯をほうり投げましたが、こんどは、いっこうに転がりません。それで、にぎり飯を足でくっつけては、

「にぎり飯やあ、待て、待て」と、おいかけました。そしてあなのところまで来ると、にぎり飯をけりこんで、自分も中へ入っていききました。

あなの中には、てんぐさまたちがいて、

「てんぐ、てんぐ、三てんぐ」と歌いながらおどっていました。

となりのおじいさんは、

「おれを加えて四てんぐ」といって、いっしょにおどりましたが、なんだかおかしくてたまりません。思わず、

「はははは」と笑ってしまいました。

てんぐさまたちは、

「こりやあ、きのうのじいさんとちがうぞ」といって、おじいさんをつかまえて、

「きのうのこぶをひつつけてやれ」といって、ほっぺたにくっつけてしまいました。となりのおじいさんは、こぶがふたつになつてしまいました。

人のまねをするもんじゃないというおはなし。

おしまい。

* てんぐ 天や奥深い山にすむ妖怪。顔が赤く、鼻が高く、つばさがある

* 加えて ^{くわ} 加えて。足して